

# 佐摩

中尾波(なかおなみ)を過ぎたところに石碑が建てられていて、銘に「上(かみ)尾波集落」とある。これは同時に道標の役をなしていると思え、碑からは道が一本西へ分岐し、仁摩町大国の門谷(もんだに)方面へ向かっている。この筋は県道31号仁摩邑南線に行き当たるから、仁万港大森間の古道だったのである。上尾波からは大森の代官所跡まで幾許(いくばく)もなく、代官一行が逸(いち)。

大屋一大森間の古道

## ⑨ 行く還往を続

おうかん

三井淳



上尾波から佐摩を俯瞰

早く大浦港へ赴かんとせば、上尾波から大國を抜け、仁摩町の仁万港にて海路に切り替えるのが最善である。

山中に「往還道」を敷いたのである。切り割りを過ぎると、そこは既に大森の佐摩(さま)となる。笹川(ささがわ)はもはや姿を消し、代わって銀山川(ぎんざわ)が左から見えてくる。銀山川は大森の龍源寺間歩(りゅうげんじまほ)に端を発し、久利町佐摩へ下る。大森そのもの

もかつては「佐摩」といい、隣接の久利(くし)は、「鋭利な刃物」の意となる。東洋史学の大斗白鳥庫吉(はくにとり)は、「サヒ」の原点は古代北アジアにあり、そもそもは祥瑞(しやうずい)、つまり「めでたいしるし」のことという(岩波白鳥庫吉全集四「東胡民族考」)。

代官下向(げこう)の主要目は諸々(もろもろ)の検見(けみ)にあったがゆえ、わざわざに不便この上ない

は「サワ」の転訛といわれ、その一部が「佐摩」であり、「サマ」の原形「サハ」の変形「サヒ」は、日本書紀では「サハ」の転訛といわれ、隣接の久利(くし)は、「鋭利な刃物」の意となる。東洋史学の大斗白鳥庫吉(はくにとり)は、「サヒ」の原点は古代北アジアにあり、そもそもは祥瑞(しやうずい)、つまり「めでたいしるし」のことという(岩波白鳥庫吉全集四「東胡民族考」)。

その「しるし」とは、露頭鉱の発光を言ったに違いない。古代にして既に、石東は豊鉱のまほらまであった。

(五十猛歴史研究会 会員 みつい・あつし)

### 日替わり連載コーナー

◇月曜日は島根県立図書館の「おすすしめ新着本」紹介 ◇火曜日は内藤博之さんの「ガウディと」カソのスペイン